岩屋岩蔭遺跡

2010プレミアム・バージョンその１

in Gihu Pref. /Iwaya-Iwakage Ruins

Copyright(C) by Taizan 1996-2010

E-mail to Taizan

『泰山の古代遺跡探訪記』Topページ

2010プレミアム・バージョン 岩屋岩蔭遺跡その２はこちらから！

11月20日、21日に岐阜県山岡町でイワクラサミット＃１が開催されました。今年の夏ごろに山岡町から私のHPのサロンコーナーにコンタクトがあり、それがご縁で、イワクラサミットに参加しました。

岐阜県には今までも数回訪れており笠置山や中津川の巨石を探訪してきていますが、山岡町にも巨石がある、 しかも夥しくあるということで、あらためて岐阜県の巨石をチェックしなおしていました。そのときにものすごく 気になったのが、金山町にある岩屋岩蔭遺跡なのです。岩屋岩蔭遺跡については岐阜県恵那郡加子母村にご実家がある 岩木宣和さんより事前に情報をもらっていたこともあり、山岡の巨石群を探訪したら必ず岩蔭遺跡を見てみたいという 願望を強く抱いて、イワクラサミットに出向いたのでした。偶然とは恐ろしいものです。サミット後の懇親会で 話し込んでしまった人が、実はその金山町の出身で、丁度岩屋岩蔭遺跡の調査報告を持ってきていた人でした。 しかも泊まる部屋も同室とか…金山町で蕎麦屋を営む小林由来（よしき）氏は仕事とは別に「岩屋岩蔭遺跡周辺調査委員会」の 委員を務める方でも在りました。そしてそのことにより、私の岩屋岩蔭遺跡探訪の厚みがすこぶる増したのであります。

小林氏のお話を聞いて、私はあらためて巨石文化存在の確信を得たのでした。岩屋岩蔭遺跡は精密な天体観測装置であり、 その微妙な計測の演出によって感動すら与えてくれるのです。巨石遺構とはまさに超古代に”彼ら”が未来のわれわれに 向けて残してくれた「隠し絵」に違いありません。巨石群の微妙な配列、わずかな隙間、部分的な平面加工、最低限の 線状痕、周辺の山との組み合わせ…によって、精緻華麗な天体計測装置であるにもかかわらず、一見では大きな石が そこにごろごろとあるだけ…という心憎い演出が施されているのです。そこには文字すらもありません。ただ、巨石群が そこにあるだけなのです。それでもその隠し絵の本質は、それらを創り、演出した側の叡智を余すところなく物語っています。

しかもその中に、”彼ら”のウイットやユーモアのセンスまでもが感じ取れるような、総合芸術として、表現されています。

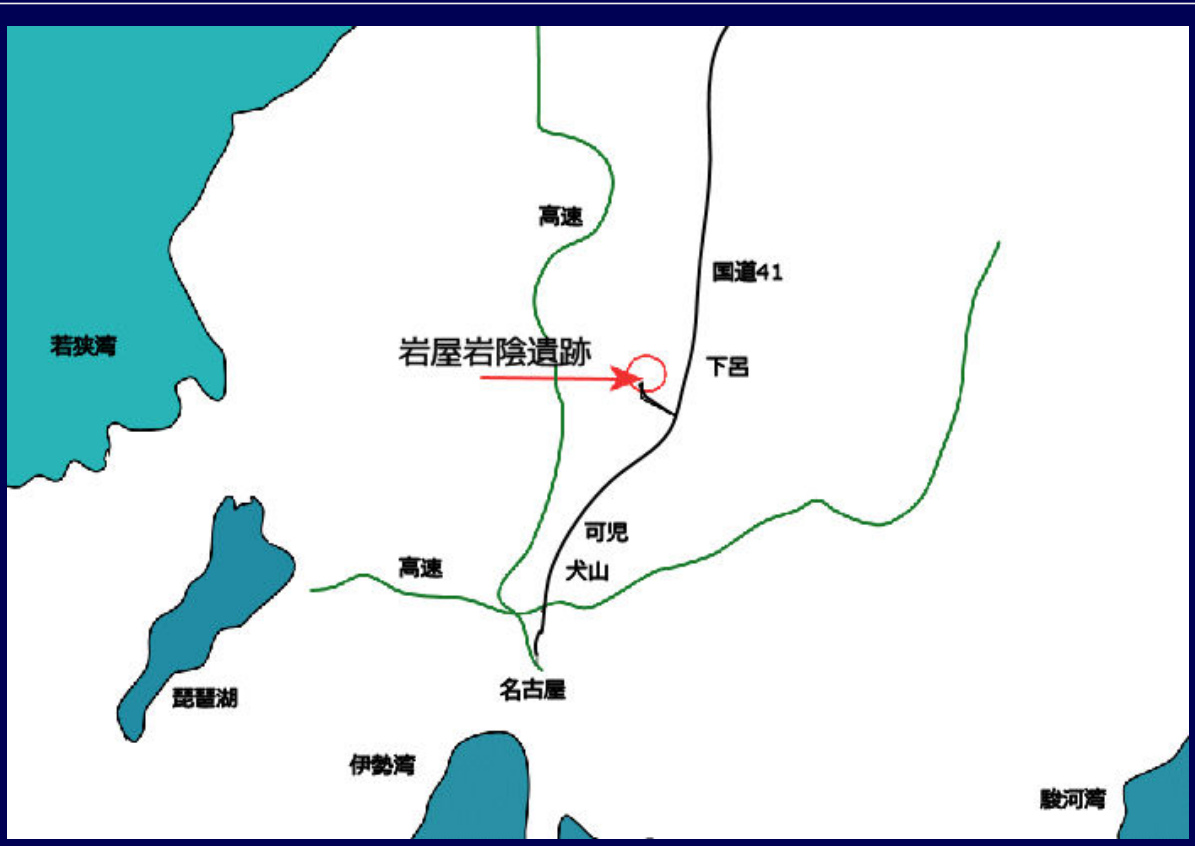
私自身もこれほどの精密な巨石遺構（既にその内容が調査報告されている）に遭遇したのは初めてです。おそらく岩屋岩蔭遺跡 と同様な天体計測装置としての巨石遺構はまだ全国各地に眠っていることでしょう。それらの調査のアクセルにこのレポートが 役に立てれば幸いです。それでは、第一級の巨石遺構；岐阜県金山町の岩屋岩蔭遺跡をご覧下さい。

1999泰山記

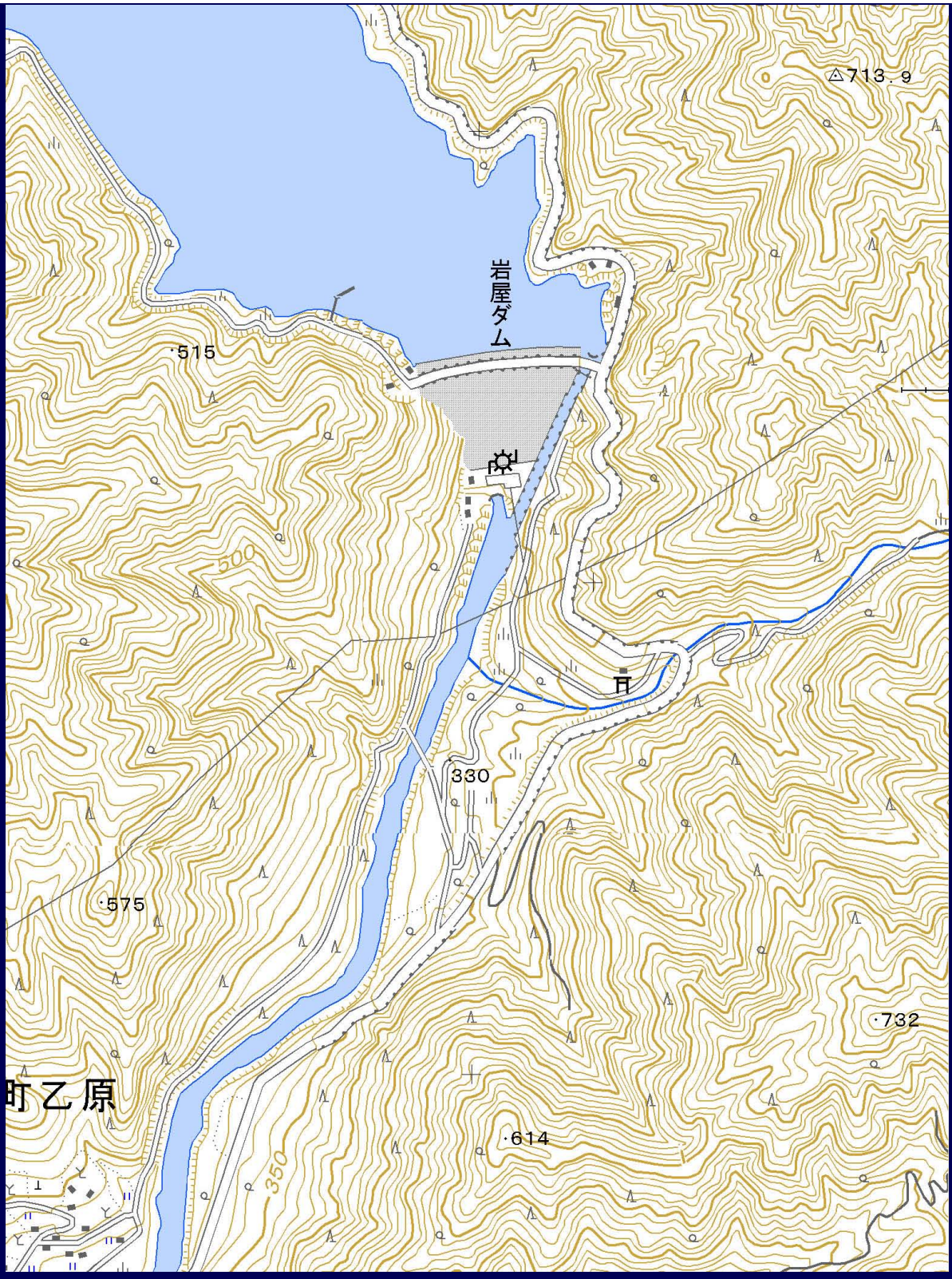
2010 高精細画像に置換え＋補足

プレミアム・バージョンその１は岩屋・岩陰遺跡本体について詳述しています。

因みに、12月21日が冬至で、今回の探訪は秋分と冬至の間のやや冬至よりの11月22日に行きました。



岩屋岩陰遺跡は岐阜県下呂市金山町にある。岩屋ダムのすぐ隣だ。名古屋市から国道41号線を北上し、高山本線の飛騨金山辺りで 国道256号線に左折してゆく。途中白山神社を過ぎてしばらく走り、県道86号線を右折して馬瀬川第2ダム方向へと向かいし7ｋｍほどで 妙見神社に着く。北斗信仰のある妙見神社が岩屋岩陰遺跡である。



県道86号線をそのまま行くと岩屋ダムに出てしまうので、小さな川を渡った渓谷部を細い道へと左折してゆく。すぐに巨石群が出現するので 分かりやすいと思う。

出所 国土地理院発行2万5千分1地形図： 飯田(金山) の部分を掲載 明示規則
http://www.gsi.go.jp/LAW/2930-meizi.html に基づく

少なくとも金山町、岐阜県ではこの遺跡はかなり知られており、調査も進んでいる。昭和44年に町の、昭和48年には県の指定遺跡 となっている。このカラー写真付きのガイド板は極めてよく出来ていて、一目でこの遺跡の凄さが伝わってくる。前述の調査委員会の 小林氏も1年以上もかけて綿密な調査をされたようだ。こうした地元の努力と成果は大いに喧伝されて然るべきだと思う。

《ガイド板の説明文》 『県指定遺跡；岩屋岩蔭遺跡を中心に、太陽や星の動きの目安となる岩の配置が見つかり、これらの巨石群が縄文人の天文台 （夏至・冬至や春分・秋分）を知る目安として利用されてきたのではないか、という考えが生まれました。静かな森の中、 巨石の傍らにたたずみ、古代のロマンに思いを馳せてみてはいかがでしょうか。』
『岩屋岩蔭遺跡は、巨大な一枚岩が庇のように突き出し、奥は洞窟になっています。この付近からは縄文時代の遺物が多く出土 しています。この岩蔭には次のような話が伝わっています。悪源太義平が祖師野の宮で人身御供の娘の身代わりになり、 現れた怪獣（大狒狒）に傷を負わせました。悪源太は、家臣の八坂日向をはじめ村の若者を引き連れ、逃げる狒狒を岩屋の洞窟に追い詰め 退治しました。そのとき使った刀「祖師野丸」を祖師野八幡宮（下流約６Km）に奉納しました。その後、昭和47年の岩屋ダム建設に伴い、 岩屋神社（妙見神社）は祖師野八幡宮に合祀され、飛地境内になっています。金山町教育委員会』

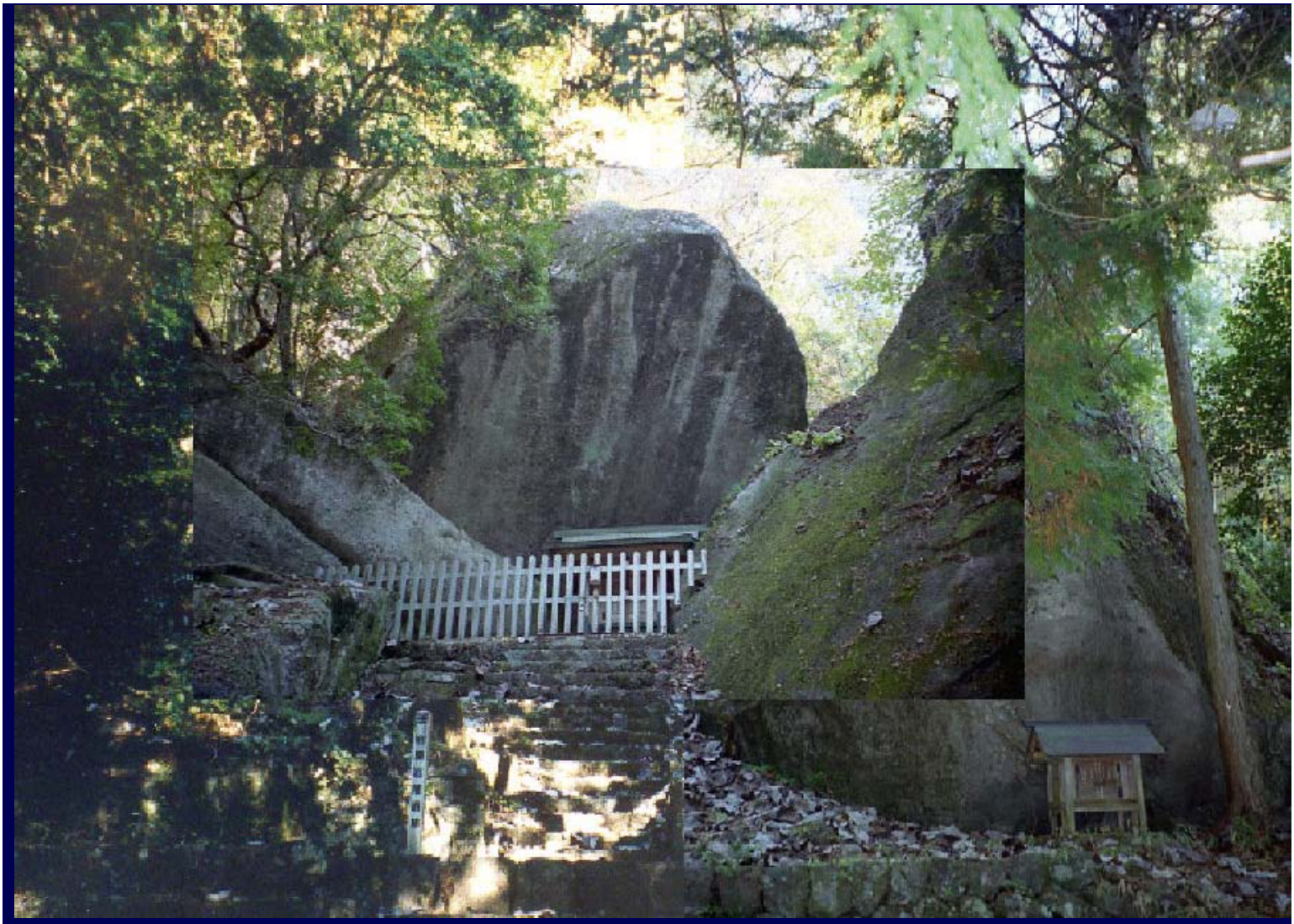
ガイド板の右側の巨石群の細い線は夏至・冬至・春分・秋分の日の出の方向を示している。 また矢印付きの太い赤線は、北極星の方向と、夏至・冬至の”山から昇る・山へ沈む”太陽の 位置を示している。つまり周囲の山との関係をも明確にしていたということである。

以下の写真を分かり易く説明するために、便宜上巨石群のロケーションを3つのグループに分けておきたい。 県道から下ってすぐに出現する方位石群をX地点、妙見神社参道入り口周辺の巨石群をY地点、本殿部の岩屋岩陰遺跡の巨石群を Z地点としておく。

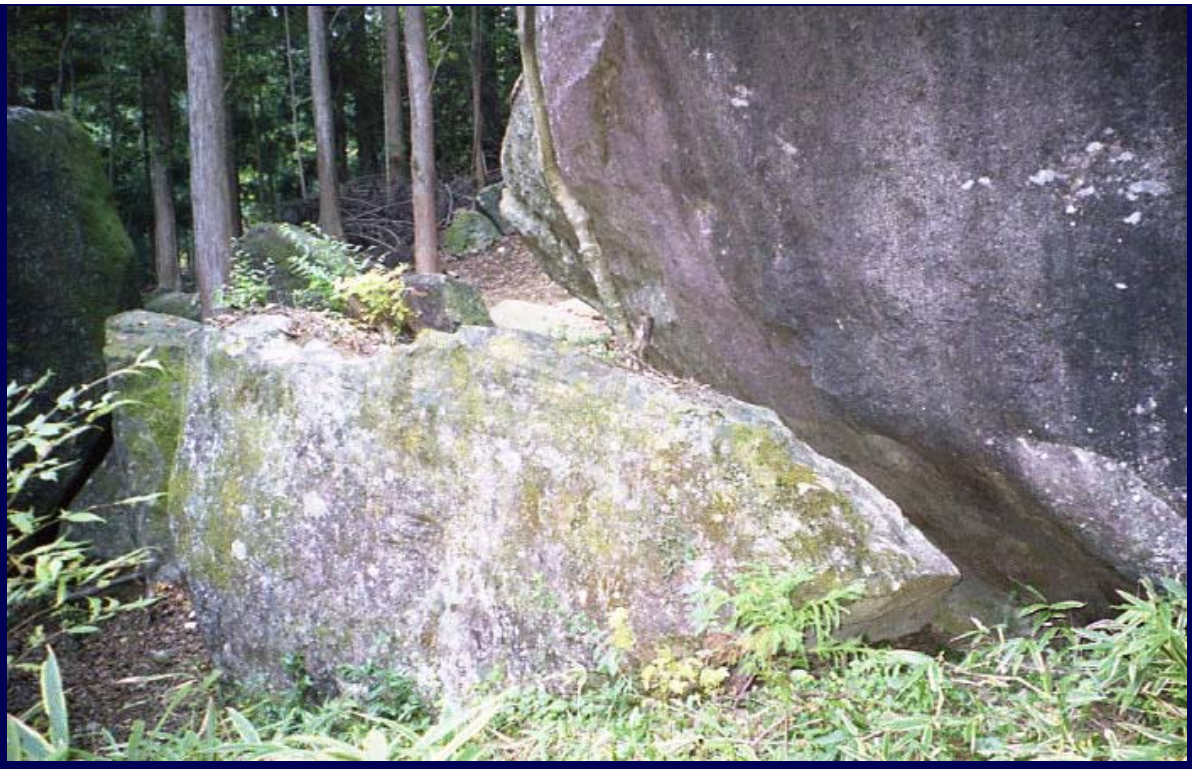
金山町への道は遠い。山岡町から西に多治見を目指し、そこから可児、美濃加茂、川辺、白川を北上し、ようやく金山に着く。 美濃加茂から北へは、飛騨川沿いに白川街道を行くことになる。金山町で右に曲がる中山七里には行かず、馬瀬川沿いを馬瀬に向かい、 ようやく岩屋ダムがある岩屋岩蔭遺跡へとたどり着けるのである。知らなければ…まずは来ないところではある。むしろ 道はずれの遺跡などを通り過ごして、デートコースに岩屋ダムへそのまま行ってしまう人が殆どではなかろうか。県道86号を大きく左に曲がったところに突如、「岩屋岩蔭遺跡」の看板が現れて、そこを数十m下るのである。つまりここは山中の渓谷にあるのだ。

周辺の山は岩石山、遺跡の場所は薄暗く、「岩蔭」と称されるのもなるほどという感じがする場所だ。…何故に"こんなところに" 遺跡があるのか…誰しもがそういう疑念を持つことは間違いない。巨石がここに運ばれたという不思議さよりも、何故にここに！ という不思議さが勝る場所なのである。 岩屋岩蔭遺跡全体は「妙見神社＝北斗信仰」として祭られている。「妙見神社」の立看に小さな参道が施されている。

参道中央には両脇に石門がひとづつある。この"石門"というのは巨石文化では重要な要素となっていると考えられる。 特に祭祀場へ行くときには必ず石門という"結界"を通りすぎねば成らない様だ。こうした様式は各地に散在する。



これが岩屋岩蔭遺跡の本体である。全体の幅約２０m高さ１０mの巨大な遺跡だ。野外コンサートホールのようでもある。 中央の扇状の大岩が「庇」と言われるもので、底面は明らかに人工加工の完璧な平面である。 両脇にその庇部を支えるかのようなふたつの巨石があるが、実際には直接これらはその庇状の巨石とは触れていない。 中央の柵の中に小さな社がある。
右側の巨石の上端部は内側に湾曲した曲面を形成している。この先端部分の加工が春分・秋分時の山から昇る太陽を拝むのに必須なのだ。



下に笹が生えているのでおそらく妙見神社参道上の巨石か岩屋岩陰遺跡本殿部分の巨石を撮影したもの。
すみません！11年前なのでどうしても思い出せません。m(_|_)m

巨石群から南方向を振り返ったところ。ガードレールがあるのが県道86号線。岩屋岩陰遺跡はこのような狭隘な渓谷部にある。

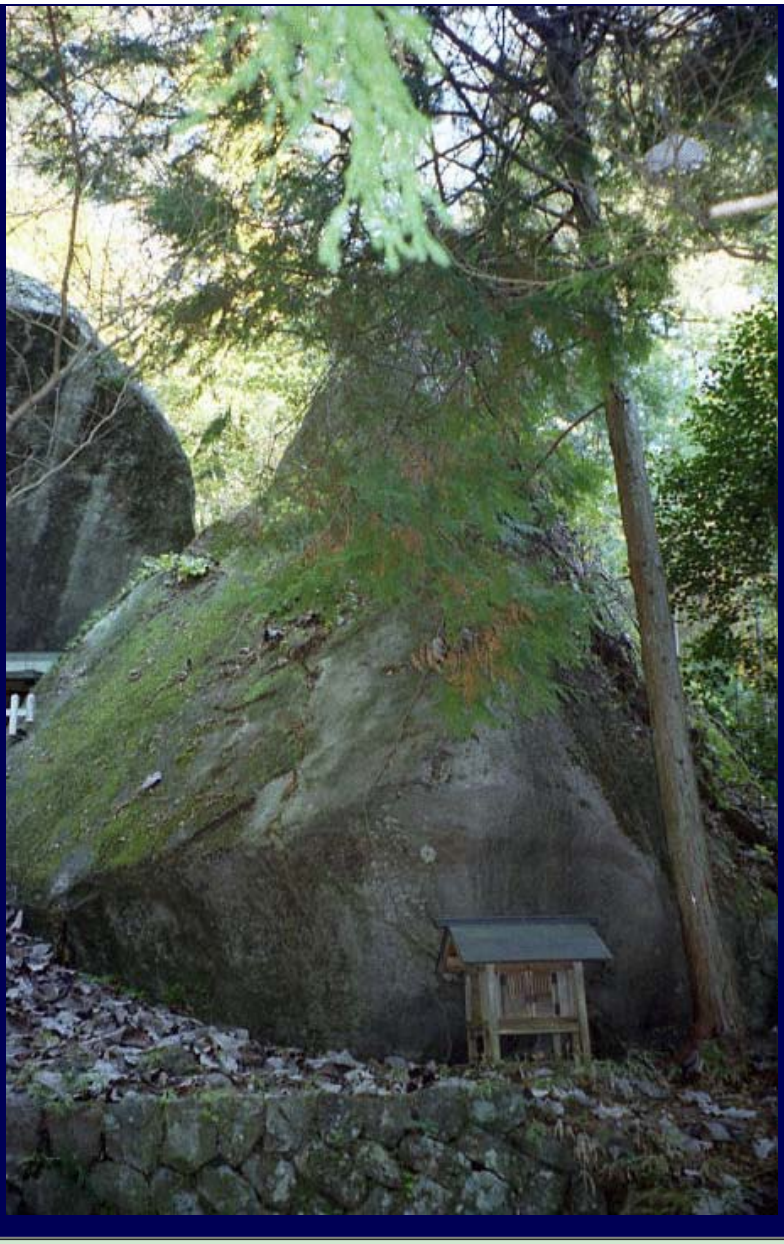
峡谷を形成している岩の状況。岩質的には地質図によれば「非アルカリ珪質火山岩」で周辺全域がこの岩である。

岩屋岩陰遺跡は巨大扇状の笠石を両脇の巨大台石で支える様式となっている。現地調査委員会では上の笠石をF石、正面右側の台石をE石、 正面左側の台石をG石と称しているので、それを使わせていただくと、この巨石はE石の頂上部である。また左側の斜めの岩がF石である。 E石頂上部の特異な形状も気になる所である。

E、F、G石で囲まれた天の岩戸構造部分の空隙は、現在は小さな社が置かれ、柵で囲ってある。この写真は笠石であるF石の根元部分で、 奥に見える小ぶりの石が実は本当のF石の支え構造になっているのである。あとでも説明するが、事実見かけ上の台石であるE石はF石と 接触していなくて、絶妙な隙間が存在するのである。

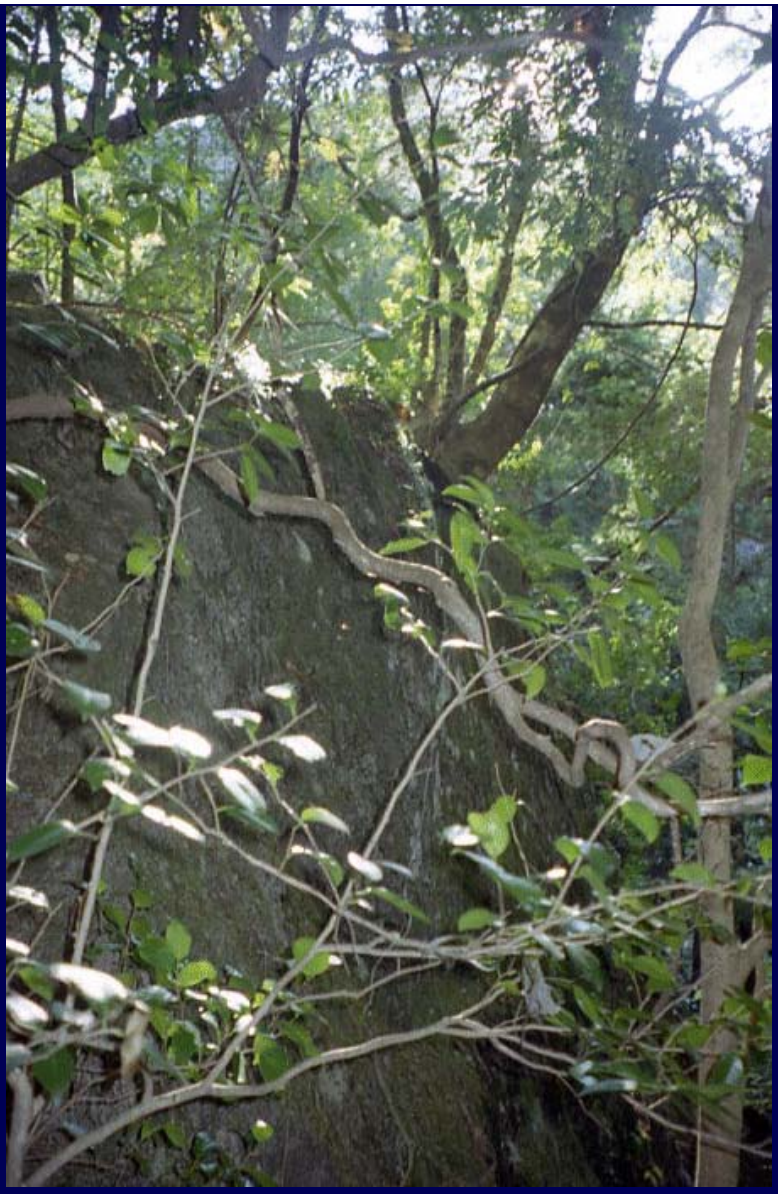
こちらは正面左側の台石であるG石の根元。G石自体が巧妙に設置されている。

台石であるE石の手前にある「メンヒル」と称されている立石で形状的には「三角石」である。



E石の全体像。手前には小さな祠もある。右の杉の右隣に立石がある。

妙見神社本殿としての全体像。山間部にようやく10時頃太陽光が差し込んできたところ。



岩屋岩陰遺跡周辺の巨石。

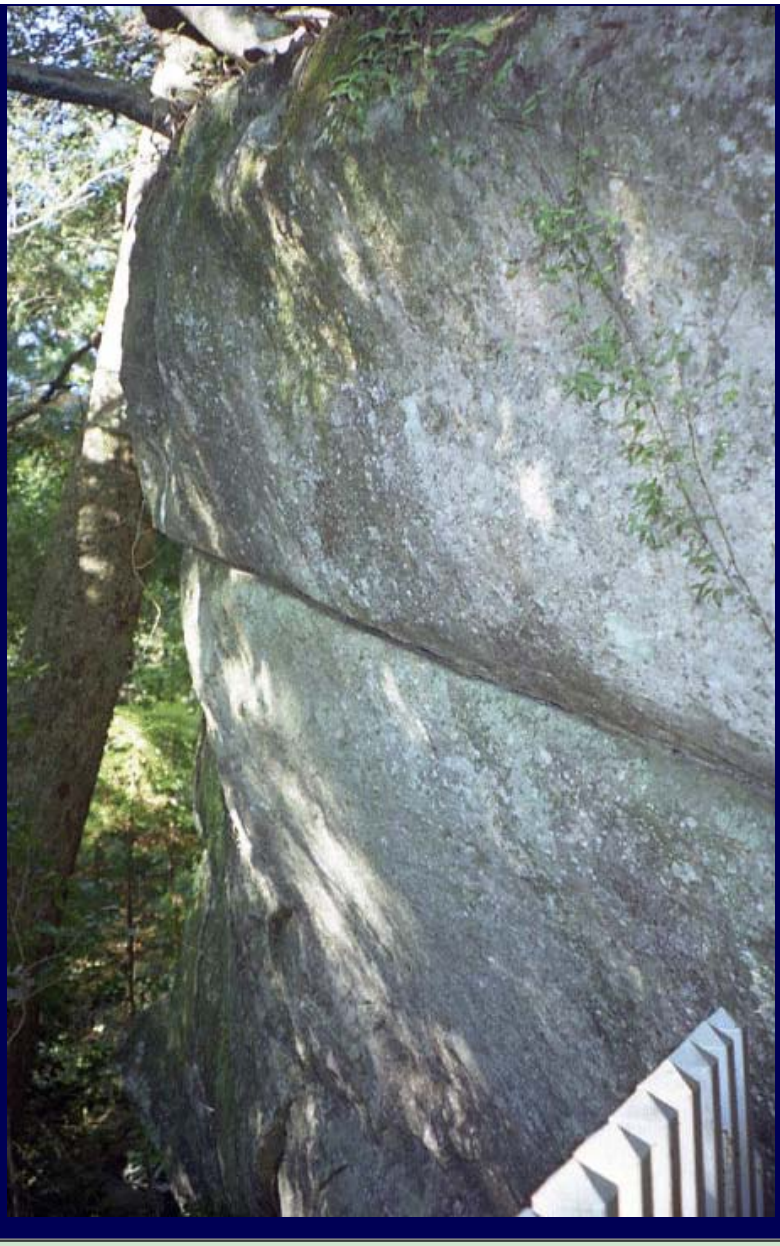
同じく。

岩屋岩陰遺跡のF石の最下部と社。

巨大扇状の笠石であるF石の正面右奥の支え構造。中央のくさび状の巨石が実際に支えていて、右側の台石E石とF石との関係を保たせている。

社の後ろから正面右の南西方向を撮影したもの。この台石はG石で、こちらはしっかりとF石を支えている。

実際にはG石は2重構造になっている。ちょうど東南方向から太陽光が差し込み、それを背に私自身の影を写したもの。



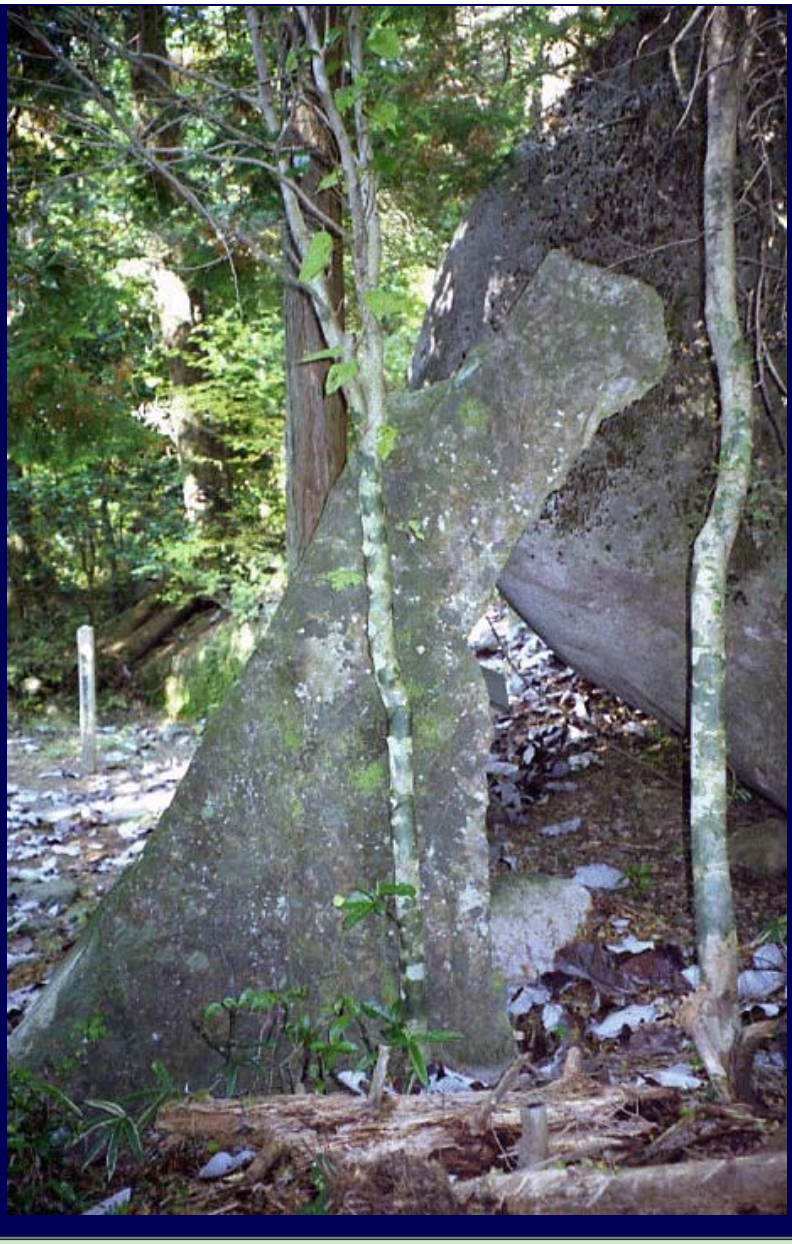
G石の延長部がこれ。南西方向に延びている。

扇状のF石の頂上部分。

岩の表情。たしかに花崗岩ではなさそうだ。火山岩。

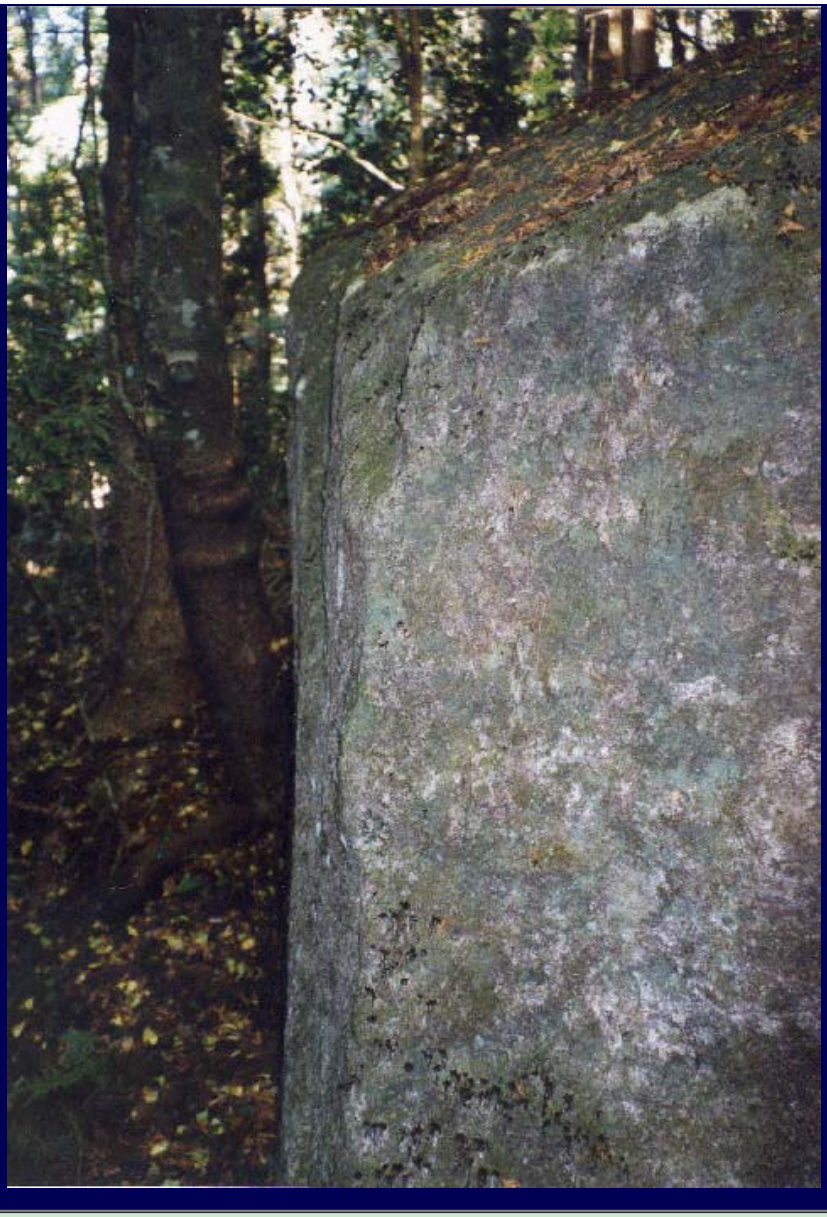
G石の表面状況。

E石から太陽光を浴びたF石をみたところ。太陽光の照射ラインとは異なるF石の幅広い白い線状痕が気になる。



「メンヒル」と称されているE石手前にある立石。横から見ると極めて不可思議な形をしている。

立石から見上げたE石の頂上部分。



岩屋岩陰遺跡の巨石群にある垂直面。

遺跡後方から回り込み、左手の巨石を滑り降りて、洞窟内部に入って見た。 上部の平坦な面が先ほどの庇状の巨石の底面である。 よく見るとその下の丸い巨石とは触れておらず、手のこぶしがひとつ入るか入らぬか位のわずかな間隙がある。 ところがこの間隙が只の隙間ではなく、冬至（だったと記憶している）の太陽が”その間隙から”光りを洞窟内に照射するのだ。

社の上のパーフェクトな平面を見て欲しい。この直線は稜線ではなく、”平面のサイドビュー”なのである。
11月22日10時頃に偶然この情景に遭遇した。F石の平滑面に平行に太陽光が入射した貴重な写真。

私が岩屋岩蔭遺跡に到着したのが午前九時半頃、一通り見まわった丁度そのときそれまで薄暗かった洞窟内部が 急に明るくなった。10時頃ようやく周辺の山から太陽が顔をのぞかせて、直射日光が洞窟内部に差し込んできた瞬間だ！ このときの感動は尋常ではなかった。太陽のこの光で、「何故ここに岩屋岩蔭遺跡」があるのかが理解できたのである。 周辺の山々をもシステムに取りこんだ精密な天体計測装置にはこうした"陰陽の対峙図式"が最もインパクトあるものとして 必要なのだと思う。そしてそれが計測の機能と共に感動を起こさせる演出をも可能とするからこそ、この陰鬱とも言える 峡谷が「祭祀場」足り得るのだろう。

岩屋岩蔭遺跡に降り注ぐ晩秋の朝の太陽光。上の写真と見比べていただきたい。 峡谷の岩蔭に太陽が照らすとその情景は一変するのだ。

2010プレミアム・バージョン 岩屋岩蔭遺跡その２はこちらから！

『泰山の古代遺跡探訪記』topへ